

第126回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2020年10月12日 (月) 郵送句会

兼題「威銃 (おどしづつ)」

- 川井素山 ○舂洗ふ漢見送る帰燕かな  
新蕎麦や祝の街の昼の鐘  
もんじや焼元祖の店の竈馬かな  
高压線三山を超へる威銃
- 保井寶正 ○威銃銃口さげる昼下がり  
コロナ禍のその巢ごもりや秋の暮  
栗飯の栗をおおめに贅の膳  
ひぐらしを聞きて寂寥生家あり
- 佐久間喬 ○コロナ禍のさりげなきごと虫すだく  
暮れ残る尾根輝やきて柿実る  
深呼吸富士どつしりと秋の朝  
空威張りする音むなし威銃
- 丸山酔宵子 ○威銃浅間の煙揺らめいて  
グラス持ち庭に幾たび月今宵  
コロナ禍に名月飛ぶよ雲の中  
雲の間に形整ふ月得たり
- 吉田啓悟 ○威銃忘れた頃に撃ちあたり  
たましひの抜けた芒は白となる  
霧深し記憶の海に舟を出す  
新米をすでに食べたかすずめたち
- 青木英林 ○山里の目覚まし時計威し銃  
名月や 諍<sup>いさか</sup> ふ声も聞ゆる夜  
落花生地下に重なる玉簾  
葉を間引く土の香鼻を 擽<sup>くすぐ</sup> れり
- 山本草風 ○風さへも茜に染める秋夕陽  
差し込む陽少し伸びたか秋そろり  
生きし今万感胸の良夜かな  
威し銃稻刈り鎌は納屋の隅

- 渡辺鯨波 ○六地蔵泰然自若威銃  
口げんか一休みして大花野  
十月やカクテル一つ發明す  
新涼やクラス委員の声変はり
- 後藤克彦 ○空蟬も空き家守りのガードマン  
稲刈りも機械化進む過疎の村  
村境赤で線引く彼岸花  
里山や補聴器響く威銃
- 永井正孝 ○坂道の雨細やかにシヤガの花  
夏木立緑ふくらみ影落とす  
凌霄や垣を乗り超へ滝と化す  
夾竹桃夏の暑さに咲き誇る
- 原 晶如 ○見下ろせるダム湖に間遠威銃  
水音の中を歩いて星月夜  
通帳は生きたる記録吾亦紅  
秋の雷組紐台に絹の色
- 佐久間たか子 ○赤い羽根さす指優しく風の吹く  
瘦せ秋刀魚いつの間にやら高級魚  
鳥威しおどろかぬ鳥居佇たせけり  
歎異抄の声に出したる秋彼岸
- 金森純女 ○威し銃気にせぬ猿の飛び歩く  
真夏日や釣瓶落としにそぞろ寒  
夜半の雨聞きつる<sup>ひら</sup>掌にぬくめ酒  
我が姪の命果てにし七月尽
- 青葉ひかる ○輝きし黄金の波威銃  
日本海漁火連なり名残月  
金木犀大なる言葉に漂いて  
青空の白いジェット機トンボ舞ふ

次回「萩句会」

日時 2020年11月9日（月）

郵送句会

兼題『霜』または『さざんか』一句

当季雑詠 三句

投句の締め切りは11月6日（金）です。